

2021/8/2

(オマケの英語教室)

manager、owner、master



外国語の原義を探ると邦訳が丁度元の意味と反対になってしまっている様な場合があるのに驚かされます。

以前の記事でも書きましたが、

例えば

マネージャー (manager) と言えば邦訳は「課長や管理者」で名詞形のマネジメント (Management) は「管理」と訳されます。

しかし英語の原義は動詞 manage が「いざという時に何とかする」で management は「いざという時に何とかする事」 manager は「いざという時に何とかする人」なのです。

原義の方は「部下の窮地を救う親分肌の上司像」で邦訳の方は「俺を窮地に陥れるなど紐付き管理ばかりをしている小物上司像」

と、まるで正反対。

又

オーナー(owner)は邦訳では「主(あるじ)」で原義は own (所有する) ですが、その更に元は owe で「背負う、責めを負う」である様です。

これまた原義の方が「人知れず」的なのに対し邦訳の方が「見せびらかし」的になっております。

更に又

マスター(master)は邦訳例では「喫茶店や飲み屋のマスター」でお客が主人の個人名を知らない様な場合に「とりあえず何か」名付けをして呼ばなくてはと「深い意味はない」のに対して、外国では master はドイツ語のマイステルから来ており原義は「親方、国家認定の職長」と言った「極めて重い」意味合いなのです。

それを我が国では、例えば外国人が営むレストラン&バー等で気軽に「マスターmaster」と連呼するものですから聞いている外国人の主は「そこ迄俺は偉くない」と何か妙な気がして

いる様です。

そういえば最近我が国ではちょっとしたレベルの人に矢鱈と

「●●の達人」とか「▲▲のカリスマ」というキャプションが付与されるのを見かけます。

是は非常に危ない傾向だと思っております。

その理由は達人やカリスマの大安売りで「その質が下がる」と言う事ではなく、言われた方がその気になり過ぎて、仮に失敗をした折に「もっとカリスマ度を上げねば」という同一方向、即ち失敗レベルの深掘りや上重ね方向に向かってしまい、立ち直りの方向性がそれ以外や極論すれば正反対にある事に気づく可能性を大幅に減じ、ミスリードする事にさえなってしまうからです。

結果、それで取り返しのつかない事になって「あの時お前らがおだててのぼせ上がらせたからだ」と幾ら騒いでも「囃子立てた当のメディア」は「こっちだって商売だ。その位当たり前だろ」と開き直るだけで「責任」なんか絶対に取ってはくれませんから。

ご用心。

追記)

いずれにせよ外国語の原義には何処となく responsibility(責任感)や a will to face the fact(覚悟の意思又は意志)が感じられるのに対して、邦訳の方では「肝心のそれが飛ばされている、の感」が拭えない気が致しております。

「かく言う自分自身」に対してもご用心、ご用心。